

高木復興大臣岩手県訪問ぶら下がり会見録
(平成27年11月23日(月) 13:36~13:46 於) 岩手県岩泉町小本駅)

1. 発言要旨

昨日から本日にかけて、岩手県宮古市、山田町、大槌町、普代村、田野畑村、岩泉町を訪問させていただきました。

田老地区のまちびらき、鮭・あわびまつりなど、あるいはまた山田地区の区画整理事業など、また町方地区の区画整理事業など、普代村の普代水門、太田名部防潮堤、島越駅周辺普及整備事業、そしてまた小本地区の漁業集落防災機能強化事業などを視察させていただきました。

昨日から本日もお会いした首長の皆様方からは、宮古市長からは、全国の皆様の御支援で岩手県内で初めてのまちびらきに至った。今後は、三陸ジオパークを拠点に観光にも力を入れていきたい。

また、山田町長からは、これからはまちづくりの正念場であると。資材高騰や住宅高騰がこれから課題になってくるのではないかという話をいただきました。

また、大槌町長からは、工事も進んできたが、住宅の完成にはあと二、三年かかる。引き続き支援をお願いしたい。

普代村長からは、二度あることは三度あってはならないということで、水門などにより津波を防いだというような話を聞かせていただきました。

また、田野畑村長からは、鉄道は復旧したが、駅周辺のまちづくりはこれから。応援職員の住宅確保に苦勞をしていると。高台移転し、浜までデマンドタクシーなどを利用しているというような話も聞かせていただきました。

また、岩泉町長からは、駅周辺を防災拠点、小学校・中学校の整備、来年秋には全て完成するであろうというような話もいただきました。

そうした話をいただいて、私からは鮭・あわびまつりで御挨拶もさせていただいたとおりでありますけれども、生活の再建にはハードの復旧だけではなく、産業、なりわいの再生が必要だと。水産業・水産加工業等の復興をきめ細やかに支援したいというふうに考えます。

また、まちづくりは首長さんたちのリーダーシップによるところが大きい。復興・創生期間への橋渡しとなる重要な期間であり、全力で支援をさせていただきたいという話もしました。

また、観光については、3県の知事から賛同を得ておまして、これから具体的に取組んでいきたいというような話もさせていただきました。

水門や防潮堤のハードの整備だけではなく、避難訓練などのソフトの取組もあわせて防災ができることを実感し、こうしたソフト面も非常に大事だということも勉強させていただきました。

また、高台移転した住民の方々とも話をさせていただきました。御意見を受けとめ、自立した生活の再建を支援したいというふうな話もさせていただいたところでござい

ます。

今後とも、被災地の状況を自分の目で確かめながら、被災地の声を丁寧に伺いながら、しっかりと復興を前に進めたい。そのように感じた2日間でした。

私からは以上でございます。

2. 質疑応答

(問) 災害復興住宅や、住宅建築が進む中で、一方で5年を間もなく迎える中で、仮設住宅での生活も続いている方がまだいらっしゃいます。そのことについて大臣自身どう感じているか、そこをお願いいたします。

(答) 地元の皆様方の御努力で、復興公営住宅あるいはまた自立再建をなさる方、住宅は進んでいると。あるいはまたハードのそういった整備は進んでいると思いますけれども、今おっしゃるとおり、まだあの仮設にたくさんいらっしゃいます。

もう大分期間も長くなって、心身ともに大変な状況だということはよく認識をいたしております。さらにこういった公営住宅等の建設をスピード化、加速化していただいて、あるいはまたそれを支援することによって、一日も早く仮設住宅からそうしたところに住まいを移していただけるような、そんな努力をこれからもしっかりと続けていきたいというふうに思っております。

御苦勞は十分承知しているつもりでございます。

(問) 今の質問に関連してなんですけれども、再建の中で金銭的な問題、住宅を建てるお金、また被災した店舗を再建するお金など、被災者の方はまだまだ苦しく、これから苦しくなると思います。国としての支援のあり方は……。

(答) そういった経済的な面も含めてですね、いろいろな形での支援もできると思いますし、またそれぞれのお立場でいろいろな課題を抱えているということもよく分かりましたので、それぞれの立場に応じた、私よく申し上げますけれども、まさに被災地に寄り添う形で、復興庁としてできるだけのことをさせていただくということが必要なんだろうというふうに思います。

(問) 昨日、三王団地のところでも、観光にも具体的に今後取り組みたいということでしたけれども、今まで岩手県、宮城県、被災地を歩いてこられて、観光振興を進めるときの課題と、今後もう少しビジョンが…、大臣としてどういうことを考えているのか教えていただきたい。

(答) 昨日、市長さんから観光にも、あそこは道の駅を核にした観光という話もありました。そこで私のほうから、2週間ほど前になるでしょうか、復興委員会の中で知事さんたちに観光を提案させていただいたところです。

というのは、まさに人口減少時代で、交流人口をとにかく持ってこようとしている、全国的にそういう流れの中であって、あるいはまたインバウンド2,000万人時代を迎えて、どこも外国人観光客がたくさんいらっしゃるにもかかわらず、東北は残念ながらちょっとまだその域に達していないと。私もまだこういう復興道半ばの中で、観光というのは少し時期尚早かなというふうに思ったのでありますけれども、しかしそうい

う提案をさせていただきましたら、知事さんからも非常に大きな賛同をいただきましたので、観光ということもこれから復興・創生の中で一つ大きな柱に位置づけられたらなというふうに思っています。

具体的にどうするかということは、今これからの協議でありますけれども、いずれにしても、東北は観光資源というものは、私はたくさんあるところだというふうに思っています。そうした方に来ていただいて、これからまさにその復興成った東北というのを見ていただくということだと思えますし、2020年オリンピックに向けて、東北地方でなにができるか。そんなようなことも、例えば聖火リレーだとか、あるいはキャンプをやっていただくとか、予選をやっていただくとか、いろいろな形でオリンピックに向けて、東北の観光がしっかりと進んでいくように、それまでもどのようにやっていくかということ、これから具体的に詰めて、東北の観光というものをやっていきたい。今はそういう段階でございます。

(問) 一点だけお願いします。

午前中、普代の水門・防潮堤を見られて、背後にある集落とかの現状を見られたと思うんですけども、すごい感銘とか、驚かれたと言われましたけれども、どう感じられましたでしょうか。

(答) まさに二度あることは三度あってはいけないということで、ついつい人というのは忘れがちなんですけれども、やはりそういった教訓というものをしっかり忘れずに、しかも当時とすればかなり巨額の予算を使ったんだと思うんですけども、それでもやはりあれだけの門をつくらなければいけないという、その村長さんをリーダーとする村の皆様方の思いというものが、今回あつた厳しい津波でも大きな被害にならなかったというところに結びついたんだと思います。

ぜひ、今回のこの津波というものを教訓にして、東北のこの三陸の皆さんが防災意識というものを持っていただいて、しっかりと、まあ四度あるなどと言ってはちょっといけませんけれども、しかしやはり災害というものは来るんだということを忘れることなく、そういう一つの象徴だと思います、あの水門だとか、防潮堤というのは。それを教訓として、東北の皆さん方がもう二度とこのような災害に遭わないように、防災の意識というものをしっかり高めていっていただいて、守っていただけたらという、そういう思いをして、非常に感動といったら変な言い方になりますけれども、すばらしい取組みを先人はなされたんだなということで、そういう思いをさせていただいたということでございます。

(問) 今回の復興において、先ほどおっしゃった被災地に寄り添うというのは大前提とはいえ、その人口減社会において計画がそんなに多大になってしまっただけでお互いに困ったことになるかと思うんですけども、そのあたりどう自治体……。

(答) 自治体の皆さん方もやはりよく考えてらっしゃいます。これは全国的に人口減少時代、しかもこういった被災なされて、そうしたところも、全国よりもさらに厳しいところだというふうに思います。

そうした中であって、いわゆるコンパクトシティという形で、あるいは復興拠点とい

う形で、これからの人口減少時代に対応したそのまちづくりをやっていただいている
というような実感も持っておりますし、そうした考え方も一つあるんだろうというふ
うに思います。

いずれにしても、そういった考え方を持つ自治体、あるいはまた違う考え方を持つ自
治体、いろいろな姿形があって課題があるんだろうと思いますので、そうしたところ
にきめ細やかに、まさに被災地に寄り添うというのが、私はそういうことではないか
というふうに思っています。

(以 上)